岡崎義恵著

日本藝術思潮

第二卷の上

岩波書店刊行

昭和二十二年十一月一日印刷
昭和二十二年十一月五日第一刷發行

日本國體思潮第二卷の上

定價百五拾圓

著者　岡崎義惠

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎

横濱市中區麦澤二十九番地
印刷者　小野通久

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地　岩波書店
（會員番號A一〇九〇〇四號）

配給元　東京都千代田區神田淡路町二丁目九番地　日本出版配給株式會社

本製・刷印堂壽文

序

「日本藝術思潮」第一卷において「漱石と則天去私」といふ問題を探究した時、則天去私といふ思想の中に、風流といふ考へ方が潜んでゐることを知つた。無論、則天去私といふ藝術觀は、西洋風のリアリズムの立場から解釋され得る點が多いには相違ないが、東洋風の禪的觀照や風流の世界として考へ得る點もあつて、これを輕視することは出來ないのである。それでこの「漱石と則天去私」の結末に、漱石の風流觀といふ一項目を置かうと思ひ、その草稿は完成してゐたのであるが、しかし風流の問題は更めてその傳統を辿つて見ることの必要を感じ、第二卷においてこれを主題とする研究を試みたのである。

本稿は風流といふ思想が支那古代において成立し、それが日本に渡來して、日本の「みやび」などといふ思想と結合し、永く傳統を引いて今日にまで及んでゐる狀態を究めたものである。しかし此處に取扱つた對象は、風流といふ具體的な事象そのものの歷史ではない。卽ち「風流の歷史」なのではない。風流といふものが何等か思想の形態を採つて文獻の上にあらはれた狀態を、歷史的に辿つてみ

ることであつた。風流といひ得る心情・行爲・作品などをすべて研究することになれば、殆ど一個の藝術文化史を形造り、更に美的精神史にも及ぶであらう。そのやうな廣汎な對象はこの小著のよくすることではなかつた。此處には唯、思想の形を持ち、從つて「風流」といふ語となつて殘つてゐるものだけを取上げたのである。それは一見「風流」の語史に過ぎないやうにも見えるであらう。しかし私は言語の歴史を研究してゐるのではなく、風流といふ考へ方が確實な形を留めて居る場合だけを據所としようと思つて、このやうな方法を用ゐただけのことである。

それ故に又、この書は實證的方法に徹しようとしたもので、哲學的思索に耽らうとしたものではない。それは考察の深さや事象の纒りを缺き、材料の羅列のやうな觀を呈することにもなつたが、從來この問題を討究する場合、不十分な材料によつて氣の利いた結論を出さうとする傾向を避け難かつたやうに思ひ、先づ徹底的に實證的な方法で出直してみようとしたわけである。しかし私の探索はもとよりなほ十分なものではなかつた。今後この問題を取上げる人はやはり更に材料を求める必要があるであらう。唯、今日のところでは、この程度の調査でも從來の研究の不備を補ふには足るものと信ずる。

この稿を草するに當つては、實に多數の研究者の業績に負ふ所があつた。既に公刊されてゐるものについては、なるべく漏れなくその業績に言及して、感謝の意を寓することを忘れなかつたつもりで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あるが、なほ一々その名をあらはすことの出來なかつたものも尠くない。この稿本の大半はこの四五年來東北帝國大學の講義に用ゐたものを基礎としてゐる。その間學生に課した單位論文の中から、私はかなり多量の材料を得た。それは本稿に攝取されてしまつた結果からいふと、誰が何を提供したか分らなくなつて、すべて私の業績であるかの如く見える。一將功成つて萬骨枯るといふことは學界にもあるやうである。それで私はこの序文の中になるべくその提供者の名をあらはし、一言感謝の情を添へて置く豫定であつた。然るにそのことが不可能に終つたのは、遺憾ながら次の事情によるのである。

本書の草稿は昭和二十年の春には一應完成し、直ちに書肆に廻さうかとも考へたが、戰爭は危機に臨み、複寫を殘すことなくしては書肆も責に任じ難いといふので、身邊の二三人を初め、私自身も急いで原稿の筆寫に取掛つた。それがほぼ完成したのは初夏の頃であつた。ところが七月十日の天未だ明けざる頃、仙臺は戰災に罹つて私の家は燒け、本書の原稿もまた灰燼に歸した。しかしその二三日前、困難な中にも萬一を思つて複寫の草稿を大學の研究室に運んであつた爲、それを用ゐて本書の刊行を果すことは出來たのである。それで本書に用ゐた原稿は、倉卒の際他人によつて筆寫されたものや、又草稿中の汚い初稿などを取合せたものから成つて居り、引用文などには多少の誤脫もないとはいへない。元來他人の調査を材料とした部分が多い上に、更にその複寫を用ゐ、今日校正に當つても

原典を參照することが益〻困難となつたので、このことは決して單なる杞憂ともいへないのである。さうしてそれと共に本書の材料として用ゐた樣々の文獻は大部分燒失したので、前に述べた學生達の調査の結果を、此處に明かにする方法もなくなつてしまつたのである。

戰の終つた當時は、本書の公刊はもはや絶望かとも思はれたが、岩波書店の盡力によつてこれを後の研究者の手に殘すことの出來るやうになつたのは、私としてすべてを償ひ得る悦びである。殊に煩はしい引用文が實によく組み上げられ、校正の勞も極めて少くてすんだことは、全くありがたいことであつた。印刷・出版の力は正に回復しつつあることを感ずる。著者も亦わが國の文化のために、奮勵せずには居られない。ただ、未だ現在の事情では、本書も上下二冊に分冊しなければならなくなつたが、上と下とは明治以前と明治以後とで、かなり感じの違つたものであるから、分冊するのも亦意味のないことでもない。尤もこの序文の冒頭に述べた「漱石の風流觀」は下の部に收めてあり、更にその末尾に附した「後記」において、風流の思想の總括を試みるつもりであるから、上を手にした讀者には下をも見て貰ひたいといふのが、著者の希望であることは言ふまでもないことである。

昭和二十一年八月

岡崎義恵

目次

序……一
風流の原義……三
雅と風雅……二五
萬葉時代の風流……三三
「みさを」と「みやび」……四八
平安時代の風流……六六
中世における過差とばさらの風流……八九
中世の歌舞演劇における風流……一〇七
茶道の風流と「すき」……一三三

書道・樂道・香道・花道の風流……一五九
一休宗純と五山禪林の風流……一七三
俳諧の風雅と風流……一九七
畫論における風流……二五三
國學者及び近世歌人の「みやび」と風流……二六六
近世小說における風流……三〇四
近世の歌舞演劇における風流……三六二
近世隨筆の風流觀……三七九

風流の思想

上

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

風流の原義

「風流」といふ語は支那から移植されたものである。梅・牡丹・菊などといふ名花が今日日本固有のもののやうに感じられてゐるに拘らず、實は大陸から移されたものであるのと同じく、「風流」も亦日本で獨得の開花を見せたのであるが、その源流は支那にある。我々は「風流」の史的展開を考へるに當つて、どうしても古代支那におけるこの語の用例の吟味を經なければならないのである。日本における最初の用例は「萬葉集」に見出されるが、我々は「萬葉集」が樣々の意味において、支那からその要素を攝取してゐることを認めなければならない。「萬葉集」で最も多くよまれてゐる自然物をみると、花は萩の次が梅であり、鳥は霍公鳥が主位であるが、これはやはり支那からの影響を否定し得ないのである。無論それを取扱ふ態度は支那と違つて日本的になつてはゐるが、少くとも取材には支那的なものを含んでゐる。

それならば支那の古い用例はどのやうなものであるかといふと、私の目に入つた所では、その用例は「佩文韻府」に最も多く列擧されて居り、今日の研究家は殆どこの外に出ない。「和訓栞」を初め

日本の辭書にはいくらか新しい用例も見えるが、その數は極めて少い。

一　（後漢書王暢傳）園廟出レ于二章陵一。三后生レ自二新野一。士女沾二教化一。黔首仰二風流一。自二中興一以來。功臣將相繼レ世而隆。

二　（蜀志劉琰傳）先主以二其宗姓一。有二風流一。善談論。厚親待レ之。遂隨從周旋。常爲二賓客一。

三　（晉書王獻之傳）獻之少有二盛名一。而高邁不羈。風流爲二一時之冠一。

四　（又樂廣傳）廣與二王衍一俱宅二心事外一。名重レ于レ時。故天下言二風流一者。謂二王樂爲二稱首一焉。

五　（又劉毅傳）初裕征二盧循一。凱歸。帝大宴レ于二西池一。有レ詔賦レ詩。毅詩云。六國多二雄士一。正始出二風流一。自知二武功不レ競。故示二文雅有レ餘也。

六　（南史王儉傳）儉嘗謂レ人曰。江左風流宰相。惟有二謝安一。蓋自況也。

七　（又張緒傳）劉悛之獻二蜀柳數株一。枝條甚長。狀若二絲縷一。武帝植レ于二太昌靈和殿前一。常賞玩咨嗟曰。此楊柳風流可レ愛。似二張緒當年一。

八　（北史郎基傳）基性淸愼。無レ所二營求一。惟頗令二人寫レ書。潘子義曾遺二之書一云。在レ官寫レ書。亦是風流罪過。基荅云。觀レ過知レ仁。斯亦可矣。

九　（又李彪傳）金石可レ滅。而風流不レ泯者。其惟載籍乎。

十　（唐書杜如晦傳）如晦少英爽喜レ書。以二風流一自命。內負二大節一。臨レ機輒斷。

十一　（世說）韓康伯門庭蕭寂。居然有二名士風流一。

十二　（又）康僧淵閑居研講。希二心理味一。庾公諸人往看レ之。觀二其運用吐納一。風流轉佳。

十三　（司空圖詩品）不レ著二一字一。盡得二風流一。

十四　（琴賦）體制風流。莫レ不二相襲一。

十五　（三國名臣序贊）標二榜風流一。遠朋二管樂一。

十六　（庾信枯樹賦序）殷仲文風流儒雅。海內知レ名。

十七　（張說秦川應制詩）路上天心重豫遊。御前恩賜特風流。

十八　（李頎詩）顧盻一過丞相府。風流三接令公香。

十九　（杜牧詩）大抵南朝皆曠達。可レ憐東晉最風流。

二十　（李商隱詩）石城誇二窈窕一。花縣更風流。

二十一　（趙嘏詩）家有二青山一近二玉京一。風流桂史早知レ名。

二十二　（又）郎官何遜最風流。愛レ月憐レ山不レ下レ樓。

二十三　（蘇軾詩）風流越二王孫一。詩酒屢出レ奇。

「佩文韻府」に掲げたものは右の二十三例である。（これらの出典については一々原書と比較してみる暇がなかつたが、目に觸れた範圍では語句の省略があり、このままでは意味をとりかねるものもある。）今論述の便宜上、私はこれに番號を附した。「佩文韻府」の用例は經史子集の順になつてゐるらしいが、此處では初め史書から出典を求め、それは大體時代順に並べてあるやうである。「後漢書」

は南北朝宋の時代に、「蜀志」（「三國志」の一）は晉の時代に撰ばれたもので、何れも唐以前のもの、「晉書」は唐太宗の勅撰、「南史」「北史」は何れも唐の時代の撰にかかる。「唐書」には二種あるが、「舊唐書」は五代の撰、「新唐書」は宋の時代の改修になるもので、何れにせよ唐以後である。「世說」以下は雜書・詩文等の例をあげたものである。「世說」は六朝宋の時代、「司空圖詩品」は唐の時代の著であり、「琴賦」「三國名臣序贊」は「文選」に出てゐるもの、庾信は南北朝梁及び周の詩人、張說・李頎・杜牧・李商隱・趙嘏は唐の詩人、蘇軾は宋の文人である。それ故「佩文韻府」は「風流」の語史とも見るべき點があるのであるが、未だその語義について何等の說明を施してゐないので、これを一つの研究と見ることは困難である。併し用語例の提示といふ點においては今日までこれを踏み出し得なかつたのである。

「辭源」は用例をこの「佩文韻府」の一部より取り、これを意義の上から左の六種に分けた。

(一) 流風餘韻也。（佩文韻府第一・九例）

(二) 言儀表及態度也。（同第二・七例）

(三) 品格也。（同第十五・十一例）

(四) 猶言風光榮寵也。（同第十七・十八例）

(五) 不拘守禮法。自爲一派。以表異於衆也。（同第三・十例）

(六) 精神特異之處。（同第十三例）

「辭源」の引例は「佩文韻府」と文字に多少の異同があるが、語句を省略した所があり、中には切るべからざる所で切り捨ててある場合も見える。なほ「辭源」は最後に(七)として「唐時長安有平康坊。爲妓女所居之地。毎年新進士釋褐其中。時謂爲風流藪澤。見〔開天遺事〕。故亦稱狎妓曰風流。」といふのを擧げてあるが、これは特殊の轉義であり、日本でも催物や細工物や又は好色のことに轉義したのに似てゐる。今これは問題にしないこととする。そこで(六)までの諸種の意味について少し吟味してみたいと思ふ。

まづ第一の「流風餘韻」といふのは、日本の諸種の辭書には「遺風」「餘流」「遺澤」「流風」「なごり」などといふ解釋が施してあり、「先王の遺風餘流」（「字源」「大日本國語辭典」）とか「先人ノ遺風」（「大言海」）とかいふ解も見える。さうしてその用例としては大抵この「佩文韻府」の第一例が擧げられてゐる。一體「風流」の語の最初の用法はわからないが、このやうな用法がまづ最も古體を示してゐるらしく思はれる。風流とは先王の美風の流といふ意味かとも思はれるが、やはりその初めは「風と流」であり、「風」も「流」も先王の優れた風化のなごりが後に傳へられて存してゐることであるらしい。（それで「風」には「風化」「教化」の意味と、それが後に影響や傳統を留める意味とがこもつてゐるやうであるが、「流」と對比する時、やはり影響の方が主な意味であらう。）さうしてこの

風化といふは、儒教的な政教主義の上から見て、教化の完遂されてゐることであり、それは主として王道に基く倫理的・政治的文化の實現を意味するのである。それはもと先王（昔の善き天子）の風を指すのであらうが、後にはそれを傳へる先人にも廣く及ぼされたものではないかと思ふ。なほ「大日本國語辭典」にはこの意味の風流の例として、「前漢書」六十九、「趙充國辛慶忌傳」にある次の文章の一部を擧げてゐる。

故秦詩曰。王于興レ師。修二我甲兵一。與レ子皆行。其風聲氣俗自レ古而然。今之歌謠慷慨風流猶存レ耳。

これは先王の風聲氣俗が歌謠によつて傳承される所に「風流」の存在を認めたものであるが、これに類する用例としては、なほ次の如きものを指摘し得る。

然則歌詠所レ興。宜下自二生民一始上也。周室既衰。風流彌著。（「文選」沈休文「宋書謝靈運傳論」）

この例は前の例と共に北村季吟も「八代集抄」の中で「古今集」序の「雖下風流如二野宰相一輕情如中在納言上、而皆以二他才一聞、」の註として引いてゐるものであつて、やはり先王の流風餘韻が歌謠によつて保たれてゐる狀態を指すのである。「文選」のこの例に對して唐の李善は「幽厲之時、多有二諷刺一、在レ下祖習如二風之散一如二水之流一、故曰二彌著一、」といふ註を附して居り、「風流」とはこの先王の美風を保つ詩歌が風の如く水の如く流傳する意味であると考へてゐるらしいのである。

逮レ至二聖文一。隨レ風乘レ流。方垂三意於二至寧一。躬服二節儉一。綈衣不レ弊。革舄不レ穿。大厦不レ居。木器無レ文。於レ是後

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com